

## 幕末明治の写真師列伝 第百十八回 宮下欽 その三十六

グリエルモ・ベルシェー (Guglielmo Berchet, 1833~1913) は、ジャーナリストで東洋学の歴史家で、明治政府から万国地理会議および博覧会での委任業務を行っていた人物で、日本側史料において、ベルシェーの肩書きは「無給領事」であったり、「貿易事務官」であったりするが、駐在日本名誉領事が正しい。

当時の外交公用語であるフランス語ではギヨーム・ベルシェー (Guillaume Berchet) といい、『ヴェネト科学・文学・芸術院紀要』(Atti dell' Istituto Veneto di Science, Lettere ed Arti) に「日本の大森貝塚 (I Shell Mounds di Omori-Giappone) と題する報告書を掲載している。これはエドワード・シルヴェスター・モース (Edward Sylvester Morse 1838~1925) の業績で知られているもので、大森貝塚の出土品はヴェネツィア博覧会の日本の部に於て展示された。

このグリエルモ・ベルシェーが、明治6年(1873)当時、ジャーナリスト兼写真家として芝のブラックの元で暮らしていたのである。

「四月八日 晴天

一、午前第六時過松蔵帰ル、○同第八時過、当所氏神五條天神社(註1) 方氏子守札、御渡シニ相成候旨ニ付、先生之御名代として宮下行候所、無程(註：ほどなく) 御神酒被下候後、御守札御渡シ被成下、則左之通、

右御守札、時としてハ御改めも可有之候間、心得居候様、且死生等之節ハ町用掛リへ相届、添書持参致スへき旨(之上可参旨) なり、○同九時前武助私用ニ而外出ス、○同午後第七時帰ル、先生へ御土産として牛肉漬五斤入一管持参ス、○彦太郎午後第二時三十分外出シ、同第七時過帰ル、○竹藏・彦太郎同断、○与三郎午後第一時前来ル、先生へ御土産として大梨子三ツ、越の雪(干菓子) 五箱之内門人生へ一箱、□日光おてふ(蝶) 様へ一箱、箱館江二箱、啓次郎殿へ一箱と先生御配分被成下、天神橋漬物一箱[も]到来ス、○右同時兵学寮方右之通御達有之、

[陸軍兵学寮からの書簡書写]

上書 宮下君

并社中 横山 如此

要用願言

一、啓次郎事共貫舍入学御願申上候、次ニ万事衣類ニ至迄、時候相当ニ御世話、伏而御願申上候、

一、事務局江者月々五拾円宛上納被下度、是又御願申上候、

一、兵学寮之義者は迄之通り、精々御写之方御願申上候、但後出来之分、成丈ケ(ルビ：なるたけ) 金子受取方ニ御取計ひ、

先目鏡代御払被下度候、内田義節々相尋、且又

延引之申訳御願申上候、中田同断、大惣同断、

成丈ケ御働返済向并都伏而(ルビ：すべて) 御計方迄、不都合無之

様御願申上候、

都而諸方は迄之通り、無滞御取計ひ御願申上候、

蛭子様江宜敷御願申上候、都而小子手廻り并取仕

舞置候品、雑物書類、写真勿論勝手ニ取払、且取

開候事堅く御断申上候、以上、

第四月八日

横山松三郎

宮下君

社中

下方下女迄

右之外ニ對シ無之一書有之、左之通、病氣ニ付治療之ため外出養生仕候間、何卒(ルビ：なにとぞ) 留主宜敷御願申上候、成丈ケ病氣ニ臥口居候積リニ而、都而取計向被下度候、以上、

宮下君

横山

右之通ニ付、社中一同申談之上、不取敢寝所左之通取極ル、松蔵・宮下・先生之カムロ、大山・武助以前之通、与三郎・啓次郎・たか・彦太郎向屋敷、竹藏以前之通、○午後第九時過、青山氏之門弟来リ、先生ニ御願申度義有之旨申候ニ付、今日横浜へ参リ、一兩日ハ滞留可致事ニ寄候而ハ、少々延日ニも可相成と挨拶致し返ス、即刻帰ル、

「十日 晴天

一、第十時頃松蔵・宮下兩人ニ而上野山内桜花景色之写真取ニ行、午後二時過帰ル、尤四ツ判三枚、双眼一枚俵候へとも、銀液ニごみ有之不出来、○善太郎手伝来リ、昨日之通普請終日致ス、○午後第八時過、横浜表より先生左之通被仰越候、

[通天楼宛横山松三郎書簡書写]

是ハ此方ニ於て種板一枚相存置候、何れ可送間、

此写真者着否や厚ク御札を述、返却可致候、

四月十日

横浜より

池之端中

右之品ハ法国(註：フランス) 先帝第三世ナポレオン崩御之凶并安藤太郎殿(註2) 之像と両枚手札写真ナリ、○大惣方手代午後第四時頃来ル、無程帰ル、

註1：五條天神社は、東京都台東区の上野公園にある神社で、江戸時代には東都七天神の一つとされ、また江戸三大天神や江戸二十五天神に数えられることもあった。

この五條天神社に横山松三郎の名代として宮下欽が行っていることは、この当時、宮下が横山松三郎に信頼されていることの証拠の一つであろう。

註2：安藤太郎は、種痘の先駆者である鳥羽藩医・安藤文沢の子として江戸四谷に生まれる。横浜英学所に留学中にアメリカ人宣教師のデイヴィッド・タムソンとサミュエル・ロビンズ・ブラウンに英語を習う。その後、安井息軒に漢学を、坪井為春・大村益次郎に蘭学を、箕作秋坪に英学を学ぶ。

さらに海軍操練所、陸軍伝習所で学んだ後、戊辰戦争では旧幕府軍の騎兵指南役、海軍二等見習士官として戦う。箱館戦争では榎本武揚のもと回天丸に乗船し宮古湾海戦で負傷。五稜郭の戦いで投降し、一年間の禁固刑に処せられる。

解放された後、語学力を買われ明治政府の外務省翻訳官に任官される。

明治4年(1871)に大蔵省に出仕。のち外務省の通訳官(四等書記官)として岩倉使節団に参加し、明治6年(1873)帰朝。明治7年(1874)には香港副領事になり、明治11年(1878)には領事となる。

(※「方」は平仮名の「よ」と「り」の合字)

(森重和雄)